

想起された〈独我論的な体験とファンタジー〉事例の3次元構造 ——独我論の心理学研究へ向けて

渡辺恒夫 東邦大学 Tsuneo Watanabe Toho University
金沢 創 淑徳大学 So Kanazawa Shukutoku University

要約

著者自身の体験を含む例外的個人的体験としての〈独我論的体験〉から出発し、組織的な体験事例の抽出とモデル構成によって、これを、心理学のテーマとなりうる現象へと展開することが、本研究の目的である。第I節では、哲学史上の世界観説としての独我論に対応するような体験や思いが子どもの頃の回想として報告される偶発的事例を紹介し、研究への動機付けとした。第II節では、大学生から多数の独我論的体験類似の事例が得られている自我体験質問紙調査をフィールドとして選び、それらの事例がいかにして得られたかを方法論的に考察した。そして、そこで用いられている事例の収集のための質問紙法を〈回想誘発的質問紙法〉と名づけた。また、事例の判定法を、〈主体変様の方法〉として特徴づけた。第III節では、3つの自我体験調査で得られた独我論的体験類似の事例を、3名よりなる判定チームによって判定し直し、60例を〈独我論的な体験とファンタジー〉事例として抽出した。さらに、それらを〈他者への疑い/世界への疑い〉、〈俯瞰する/俯瞰される〉、〈哲学的/ファンタジー的〉という3種の分類軸によって分類し、3次元空間に配置して構造化した。第IV節では、方法論的な反省および、構成されたモデルの意義の考察がなされた。

キーワード

独我論的体験, 回想誘発的質問紙法, 主体変様の方法, 大学生, モデル構成, 間主観性

Title

Three-Dimensional Model of Cases of Recollected "Solipsistic Experience and Fantasy": Toward a Psychology of Solipsism.

Abstract

Starting from our personal experience, and proceeding through the systematic sampling and structuralization of numerous cases of "solipsistic experience", we tried to establish a theme for psychological study based on these neglected experiences. All cases were treated as "texts", that is, data for qualitative analysis. In section 1, several spontaneous cases, some corresponding to the two types of solipsism, were presented and considered in order to motivate and facilitate a more systematic study. In section 2, three sampling fields, which were collections of "I-experience" from college students, were presented and considered, since many cases similar to solipsistic experience were found in the three sampling fields. The method of assessing these cases was characterized as an "idiomodific" method, and a special kind of questionnaire method to collect these cases was called the "recollection inducing questionnaire method". In section 3, 60 cases in total from the three sampling fields were selected by three "judges". These cases were newly categorized as "solipsistic experiences and fantasies". They were arranged according to three classification axes: "doubt about others/ doubt about the world", "looking down/ looking up", and "philosophical/fantastic". In section 4, the significance of the three-dimensional model constructed above was considered. Several methodological reflections were added.

Key words

solipsistic experience, recollection-inducing questionnaire method, "idiomodific method", college students, model construction, intersubjectivity.

I 序論——本研究の趣旨、方法、目的

著者らの研究の目標は、「独我論」が心理学研究のテーマとなりうるし、その価値もあることを示すことである。一連の研究の最初のものである本稿では、そのためまず、「想起され記述された独我論的体験」についてのテキスト資料の収集、分類、考察を行う。資料を収集して研究することこそ、心理学研究の成立条件だからである。なお、このようなテーマでの研究例は、著者らの知る限り心理学界の内部では皆無に近い（1）、以下に詳しく研究動機の説明をすることとした。

I. 1 独我論と独我論的体験

I. 1.1 哲学としての独我論

「独我論」とは、哲学史上の1個の世界観的学説として定着している語“solipsism”の訳である。「唯我論」「独在論」とも訳されることがある。

独我論には、自己の意識以外に世界には何も存在しないとすする説と、自己の意識に類似した他者の意識というものとは存在しないとすする説とがある。前者の独我論は後者の独我論を論理的に含んでいるので、前者を広義の独我論、後者を狭義の独我論と称することもできる（広義の独我論の方は主観的観念論とも言われる）。本稿では、単に、「独我論（的）」という場合、双方を区別せず指すこととする。

独我論を心理学的研究の対象とすること、独我論の真偽を論じることとは別のことである。臨床心理学の黒田（2002）は、他者の心は直接認識できるという立場から「独我論論駁」を試みているが、本稿では、そのような認識論的な「立場」としての独我論を扱うのではなく、独我論的な問いや懐疑を抱くこと、その結果として恐れや孤独を感じたりすること、等の、「体験」、「心理現象」としてとらえるのである。

独我論的「体験」といっても、後にあげる例のように、子ども時代の回想の事例には、「自分は他の世界からロボットの世界に送りこまれたたった一人の人間ではないかと思っていたことがある」といったファン

タジー的な世界観が見られることも少なくない。そこで、独我論的な体験や思いや世界観の回想を包括する心理現象として、「独我論的な体験とファンタジー」と名づけてタイトルとしたのである。ただし、以下、特に断りのない場合は、単に「独我論的体験」によってこれを略称させることとした（2）。

独我論を哲学者の思索の場以外に、心理現象として発見できるだろうか。独我論は著しく常識とはかけ離れた世界観であって、考えすぎたあげくの哲学者の妄説に過ぎないと一般には信じられており、哲学以外の場では揶揄の対象になって来たという経緯がある。例をあげると、ゲーテの『ファウスト』（Goethe, 1932/1958）の第2部には、ファウスト博士の助手に化けたメフィストを生意気な学生が訪問し、議論を吹っ掛けたあげく、「世界は、私が造り出すまでは存在しなかった。太陽は私が海から引きあげたのだ……」などといった科白を吐いて去る場面がある。これは訳註によると、当時流行のフィヒテやショーペンハウエルの主観的観念論の思想を皮肉ったものだという。また、SF作家ハインラインの『かれら』（Heinlein, 1982/1959）は、独我論者を中心に据えた思弁的な小説であるが、主人公は精神病院の患者という設定で、独我論の真偽をめぐる精神科医と論争をしたりする。

I. 1.2 病理としての独我論

この、独我論者が精神病院の患者というSFでの扱いは、心理学やその周辺でのこれまでの独我論の扱いを象徴するものといえる。事実、統合失調症（分裂病）圏の精神疾患において、体感的独我論とでもいべき体験が訴えられることがある。島崎（1976）は、そのような体験に有情感喪失（Desanimation）の名を与え、次のような例を引いている。「お母さんは家の中をあちこち動いていました。何と言ったらいいでしょ。お母さんはまるで木で出来た物みたいでした。次から次へと、物を運んだり、煮物したり、作ったり……けれど本当でないのです。まるで糸であやつられてるようで、人形みたいで、生命というものが中にないように見えました。」体感的というより認知的な体験の例として、臨床心理学の石川（2001）は、ある医師に分裂病（統合失調症）と診断されたが精神病圏にはないとすする青年との面接について、『他人にも

自分と同じような意識というものがあるのか?』ということを実際に話し合うということもあった(彼は意識があるのは自分だけではないかと感じることがあった。)」と報告している。また、メルロー-ポンティ(Merleau-Ponty, 1952/1982, p.692)は、シェーラーからの孫引きとして(3)、「事物が本当にそこにあるかどうか確かめるために絶えず背後を振りかえってみる」患者について言及している。

こうしてみると、独我論は哲学か精神病理の領分に属し、心理学において「心理現象」「心理学的事実」としてテーマ化が可能とは考え難いかも。にもかかわらず、著者らがこれをテーマ化が可能であり必要でもあると考えるのは、以下の理由による。

1. 2 心理学的テーマ化の可能性

1. 2. 1 偶発的事例との遭遇

まず、「哲学者」でもなければ「患者」でもない人々が、児童期から思春期にかけての回想として、独我論的な懐疑や想いを語ることもある。以下、具体的な事例を通じてみてゆこう。事例1は、小説家の増田みず子が、ある作品の付録の対談の中で回想している例(増田, 1986)。事例2は、著者の一人が、ゼミ「夢の科学」への履修希望理由書中に、たまたま発見した男子学生の例である。

【事例1】

増田 子供の頃から、生命というのは何だろうなあと、自分が生きているということ、人間であるということが、なんかとても不思議な気がしまして、それを知りたいがために生物学をやったようなところもありまして……。

河野 なにかきっかけがあったの。

増田 きっかけということではなくて、なんていうのか、子供のときに、非常に傲慢な子供だったと思うんですけどもね。自分は意識というものを持ってますでしょう。それでいろんなものを見ている。だけど他の人たちのことは何もわからない。もしかしてこの世に生きているのは自分だけじゃないかというように、それで周りで動いている人間たちは、ほんとは何も考えていないロボットみたいなものじゃないか。そういう孤独感がありまして

(笑)。というのは、周りとなかなか意気投合とか、すごく気心が知れるとか、あんまりそういうことがなかったような気がするんですね。そのためだと思うんですけども。

河野 まあ小説を書きたい衝動での、自分は特殊だという感じがあって……。

増田 そうですね。

【事例2】

……余白がだいぶあるので、昔思ったことのあることですが、多分心理学的な事だと思うので書かせて下さい。いつだったかは忘れましたが、本当に人が存在するのかという事です。自分は認識できるので存在はしているのですが、他人は外見しか見る事ができないのだから、自分と同じようなの中身は空なのかわからなくなったのです。結局出した仮定は、自分以外の物事は全て自分のために存在しているのではないかというものでした。周りの人には自分勝手に自己中心的な考えだと言われましたが、人がいて自分がいるという考え方は、常識ですが誰も絶対に知ることはできないで納得してしまっている事です。今の自分も結局「納得」してしまっている訳ですが……というより、どんな答えをもってしても「理解」する事はできないので、「納得」するしかしかたなかったのです。ひさしぶりに思い出したので書いてみましたが、あまりうまく書けなかったようです。

このように、独我論について語らせようといった意図のない場で出会った事例を、本稿では「偶発的事例」と呼ぶこととする。

次の事例3は、インターネット上の匿名掲示板「2ちゃんねる」において、「子供の頃の奇妙な思考、観念、妄想」というテーマで様々な人が書き込んだ書き込みから、2つほど抜き出してきたものである。

【事例3】(2ちゃんねる 哲学スレッド)

- 1, 風呂に入っている時、風呂場の中が密室になるけど今風呂場の外はどうなってんだろ?とかお父さんとお母さんが本当は悪魔で今との姿にもどっているんじゃないか?とか…
- 2, この世界は全てベニア板でできた舞台のセットみたいにできていてぼくの存在は誰かの実験でしかないんじゃないか?とか、つまり例

えばテレビの映像の世界はホントはそんなの
ないし、僕の行く先々をその度に見えるところ
だけ作っているんじゃないか？とか、友達は
みんな、そのことを知ってるけど秘密にして
いるんじゃないか？

この2例は、事例1や2とは、やや趣を異にしてい
る。「広義の独我論」(I.1.1 参照)を出発点としなが
らも、ファンタジー的な世界観が営まれているように
感じられるのである。独我論的「体験」と言うより、
独我論的「ファンタジー」の方に入る事例である。

以上3例(正確には4例)、それぞれ、文芸作品、
学生の自発的報告、インターネット掲示板という異質
的な場から一例ずつを例示したが、これ以外にも著者
らは、これまでいくつかの偶発的事例に出会ってきて
いる。

1.2.2 自己体験

I.2.1が、独我論のテーマ化の「可能性」を示唆す
るものであるとすると、次に述べることはテーマ化の
「動機」を示すものといえる。著者らは自身が、児童
期まで遡ることのできる独我論的体験の持主なのであ
る。

【事例4】

子どものころ、たぶん小学校の低学年の頃だった
だろうか。(……)が、当時の私にとって、これら
は、楽しくも不思議な空想だった。/こんなこと
を考えているとき、しばしば私は、今、ここに私
がいることだけが事実で、あとのことはすべて誰
かの作り物であるかのように思えてきた。私は、
後ろを振り向くと、この私が見ている世界を、誰
かが大急ぎで用意している「舞台裏」が見えるか
もしれないと思い、あるときは舞台裏の人々に気
づかれぬようにそーっと、また別のときは不意を
つくように大急ぎで、後ろを振り返ってみたりし
た。(金沢, 2004)

【事例5】

同時に、もう一つの昏い疑いが頭をもたげ
た。……ひょっとしてあの子は、内部が空洞に
なった立木のように「からっぽ」ではないか。あ
るいは芯の芯まで機械人形ではないか。/なぜな

らば、私は、ある存在に心がある、という事態
を、その存在が私である、という仕方では理解
できなかったから。/(略)私は母や父や兄や友
達に心がある、と思う。そのとき私は、自分が母
や父や兄や友達として生きている事態を想像して
いるのである。ところがそれは想像であって現実
ではない。……/ゆえに、私が渡辺恒夫であるか
ぎり、それ以外の、母や父や兄や友達や愛犬を含
めたあらゆる生き物には心がない……。そんなこ
とを、いつからか、ボンヤリと夢のように考えて
きたのだった。/双眼鏡の中のあの子も、心のな
いからっぽ。地球上の何十億の人間みな、からっ
ぽ。私は孤絶感と恐怖で身も縮む思いだった。(渡
辺, 1996)

以上、著者二人の事例を公刊物の中から引用した
(4)。事例4が「広義の独我論」、事例5は「狭義の
独我論」に属するが、ともに「体験」というにふさわ
しい内容を備えると言えよう。なお、事例4には、
「舞台裏」といったファンタジー的要素が含まれてい
ることに留意しておきたい。

I.3 先行研究からの方法論的示唆

自己体験があり、しかも他にもいくつか偶発的事例
を発見した、という研究動機が明示化されたが、これ
だけで、おそらく多数を占めるであろう「独我論非
体験者」の関心を掻き立てるに十分だろうか。独我論
的体験を、普遍性あるテーマへなりうるものとして提
示するには、どのようにすればよいであろうか。

第1に、独我論的体験の事例は、僥倖に頼ることな
く収集・抽出できることを示すことである。そのため
には、①文芸作品、日記、他の調査での資料、といっ
た多様なフィールドから事例を発見・抽出する、広く
共通了解の得られる方法の開発。②組織的に事例を収
集できる調査法の開発、が必要となる。いずれにしても、
事例の収集・抽出にあたって鍵となることは、何
をもって独我論的体験とみなすかという、判定基準の
明確化である。

第2に、抽出された事例を考察して、そこに何らか
の「構造」を発見することである。実際、すでに紹介
した(自己事例を含む)偶発事例を概観しただけでも、
それらが等質的とはいえず、秩序立てた分類の仕方が

いくつか適用できそうなことが予想できる。もし、複数の分類軸を組み合わせることによって「他の研究者が継承可能な実体性をもつ構造モデル」（西條，2003）を浮かび上がらせることが出来たならば、異なる年齢や文化の集団への研究結果をお互いに比較することが可能になり、ひいては発達や異文化比較といった分野へも持ち込み可能な仮説を生成することができるだろう。

次に、これらの目的のために参照できそうな先行研究について述べる。

1.3.1 自我体験の研究

自我体験とは、「なぜ私は私なのか」、「なぜ私は他の人間ではないのか」、「なぜ今、ここに自分がいるのか」、「私は本当に私なのか」といったように、「それまで自明であった具体的経験的な自己像・自己概念に基づく自己理解への違和や疑問が生じる体験」（渡辺・小松，1999）である。体験報告の頻度は大学生で20%前後であり、8-12歳に初発したと回想されることが最も多い。渡辺・小松（1999）や天谷（2003）は、従来、臨床事例中の散発的報告が主だったこの体験について組織的に調査し、発達心理学の研究テーマとして認知させることに成功している。この自我体験研究の副産物として、独我論的体験が得られることがある。

【事例5】高2，17歳。

7，8歳頃、今も続いている。／どんなに他人のことを知りたいと考えていても、その人の考えることがすべて分かるわけではない。どんなに『あの人になりたい』と思ってもなれない。なんで私は私として生を受けたのだろう。おとなりの子として生まれてもよかったのに、とあれこれ考えているうちに、やはり自分は自分でしかないと感じた。／その時は、他人もそう考えているだろうとはとても信じられなかった。自分一人がそう感じているだけで、他の人々は私のために生きているのだと考えていた。もっともはっきりそう考えていたわけではないが、意識下にはそういう考えがあったと思う。いつの間にその考えを改めたのかはわからない(5)。

この例に独我論的体験の要素が含まれていることは、一瞥では見落とされやすい。けれども、前半の「なぜ

私は私であって他の人間ではないのか」という自我体験が後半では「自分一人だけが」という自己例外視体験へと変容していることから、後述の独我論的体験の基準に照らして境界線上に位置づけられる事例である。

ところで、前述の渡辺・小松の調査および引き続く渡辺（2002b）では、副産物的に多数の独我論的体験類似の事例が得られたため、これに、自我体験の下位側面の一つとして「独我論的懐疑」という名を与えている。そこで本稿では、これらの調査を独我論的体験事例の組織的抽出のためのテキスト・フィールドとすることにし、調査結果を見直し、あらためて体験事例の抽出を行うこととした。なお、Ⅱ-4で詳論するように、これらの自我体験調査からは方法論上からも多くの示唆を得ることができ、事実上、独我論的体験調査についての探索的調査の位置づけが与えられることとなった。

1.3.2 マズローの至高経験の研究と黒田の主体変様的方法

マズロー（Maslow, 1962/1998）の至高体験の研究では、「あなたの生涯のうちで最もすばらしい経験について」ということで、約80名との面接の結果、190名の大学生へのアンケート調査、約50名の彼の著書読者の感想を調べている。その後、神秘主義、宗教、芸術、創造性、愛情などに関する多数の文献を調べた。これによって彼は至高経験の存在を確かめた。ただし、彼は至高経験を自分自身の体験に基づいて述べているのであり、出発点は自己体験にある。同じく自己体験から出発した本稿にとって、参考になるところが大きいと思われる。

前述の黒田（2002）は、マズローの上記のくだりを引用して、「この研究は統計的ではなく、マズローの研究そのものは主体変様的方法である」と評言している。ここで主体変様的方法とは、黒田が、西洋的な学的認識に特徴的な「客体観察的」な認識方法に対置させて、東洋的な学的認識を特徴づけた認識方法である（6）。たとえば、禅において「無我」とは、客観的に観察して認識できるものではなく、修行によって自らから無我の境地に達し、無我を身をもって体験する（＝主体が変容する）ことが即ち、認識なのである（黒田，2002，p277）。従って、黒田の評言を敷衍す

るならば、至高経験の研究では形式内容とも極めて多様なテキストから「客観的に」至高経験を「観察」するというのはもともと不可能であった。それゆえ、至高経験を見分ける方法としてマズローが暗黙裡に訴えたのは、至高経験を体験的に知っている研究者自らが、これらの記述を読むことによって、新たにそれを身をもって体験する（＝主体が変容する）ことである、ということになろう。後述（Ⅱ.4.3）のように自我体験の研究でも、同様な意味で主体変容的方法が、データ抽出という核心的な場で用いられていることを指摘できるのである。

1.3.3 やまだの「現場心理学のモデル構成」

やまだ（2002）の現場心理学のモデル構成論によると、「特定の現場に根ざすローカリティをもちながら、他者と共有できるような一般化をする」（p108）という矛盾した要請をともに満たすには、何らかのかたちでのモデル化が有効と考えられるのであり、本稿の目指すところとも共通点が多い。以下の記述でも、適宜、やまだの構想を継承発展させた西條（2003）の「構造構成的質的心理学」と併せて、参考にすることとする。

1.4 本稿の出発点、構成、目的

以上の考察にもとづき、本稿の出発点と構成を方法論的観点から概観する。

1.4.1 出発点——究極の現場としての自身の体験

本稿の出発点は、マズローの至高体験の研究と同じく自己自身の体験である。ここでマズローが、「だれか他の人が研究を繰り返さなければ、データは信頼するに足るものと考えられないことを、わたくしは警告しなければならない。このような研究にあつては、実際に投影のおこなわれる可能性は大きく、もちろん研究者自身が看破することはむづかしいのである。」（訳書、p.44）と述べていることに耳を傾けておこう。ただ、「データは信頼するものにならない」から「公表するに足るものにならない」とすると、「最初の研究」が永久に公表されないことになってしまうので、最初の研究の中で可能な限り解決しておかなければならない。著者らの解決策は、自己体験を持つ二人の共

著とすることであった。さらに、調査データの構造化にあたっては、もう一人判定者を依頼した。哲学者なら、生涯ひとりで独我論を思索しても哲学者を自称できるが、心理学ではそうはいかない。共同作業が成立すること自体が、独我論が心理学のテーマになりうることの一つの証拠立てとなる。

やまだ（2002）の現場心理学のモデル構成論に当て嵌めれば、自身の体験とはいわば「究極の現場」である。心理学研究のテーマ選択における自己経験の役割は、従来、客観性を旨とする学術論文においてはまず明示されることはなかった。本稿でこれを明示するのは、なぜ独我論的体験という例外的なテーマを研究するのかという疑問に対し、研究動機を明らかにするためであるが（7）、究極の現場としての自分自身の「例外的体験現象」から出発しても、これを共通理解性のある現象、すなわち「心理学のテーマとしうる現象」へと展開の可能なことを示すことで、個人的例外的体験のテーマ化を促進するという意味合いもある（8）。

1.4.2 本稿の構成と目的

以下、Ⅱ「データの組織的抽出のフィールド」では、多数の独我論的体験類似の事例が報告されている自我体験調査（渡辺・小松、1999；渡辺、2002b）をデータ抽出のフィールドとしてえらび、それら「独我論的体験候補事例」がいかにして収集されたかを略述する。その際、自我体験調査の詳細はそれぞれの論文を参照のこととしたが、独我論的体験調査のための探索的調査という位置づけを与えることになったため、煩を厭わずくり返した部分もある。実際、自我体験事例の抽出法は、3節での独我論的体験抽出法の土台となったのだった。

得られたテキストデータ（候補事例）を見ると、一定の分類が可能であることが予想された。そこで、Ⅲ「データの抽出とモデル構成」では、第3の判定者の協力をえてデータを抽出しつつ分類判定を行い、3本の分類軸を組み合わせた三次元構造モデルを作り上げた。本稿の中心となる部分である。

Ⅳ「総合的考察と展望」では、以上の結果に基づき、用いた方法論の評価と出来上がったモデルの考察を試み、心理学にとっての独我論的体験研究の将来的な展望を行う。

以上、まとめると、本稿は、①究極の「現場」としての自分自身の〈独我論的体験〉という例外的体験現象から出発し、②組織的なデータ抽出とモデル構成によって、③これを共通理解性のある現象、すなわち、「心理学のテーマとしうる現象」へと展開することを目指すものである、ということができる。

II データの組織的抽出のフィールド

II. 1 フィールド I

—自我体験質問紙調査 (I)

この調査は、渡辺・小松 (1999) によって発表されているので、本稿の理解に必要な最小限の記述にとどめる。また、発表されたのが学会誌であったという媒体の制約上、明示できなかった点や、本稿の目的に照らした方法論的考察を、II.4 に補った (9)。

II. 1. 1 「自我体験」の調査方法

①自我体験を、「それまで自明であった具体的経験的な自己概念に基づく自己理解への違和・懐疑にかかわる体験」と仮定義した。②思想史上の古典や従来の研究を参考にして質問項目を仮選定し、予備調査を実施した。③誘発された自由記述の内容を検討し 19 項目からなる質問紙を作成した (表 1)。この際、独我論的体験にかかわる自由記述が予想以上に見出されたことが、項目選定に反映されることとなった。④各項目には「はい」「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。1 つでも「はい」と回答した者には、「はい」と答えた項目のうちで最も早くから考えたり体験したりした項目 (初発体験項目)、ならびに、その考えや体験が最も印象に残っている項目 (最印象体験項目) について、それぞれ、最初に起こった年齢、きっかけ、状況、具体的な内容、その後どうなったか、についての自由記述を求めた。⑤ 3 大学の学生 345 (男 102 ; 女 243) 名を対象とし、教養心理学の授業中に無記名で実施した。なお、3 大学の学生にはいわゆる哲学科の学生は含まれていない。平均的な大学生群といえる (10)。

II. 1. 2 「自我体験」の調査結果と

「独我論的懐疑」事例の抽出

a 質問項目の因子分析 自我体験の構造を検討するため因子分析を行い、抽出された 4 因子に、「自己の根拠への問い」、「自己の獨一性の自覚」、「主我と客我の分離」、「独我論的懐疑」の名を与えて、4 類型から成るものとした。

b 自由記述の判定 自由記述中で報告された事例について、自我体験の名に値するか否かの判定を、判定基準を作成して 2 名の判定者により独立に行った (一致率は 93.0%)。判定の異なる例については協議により判定を一致させた。「独我論的懐疑」の類型に分類された事例は、28 例であり、初発か最印象かを問わず全回答者中では 26 名 (7.8%) が独我論的懐疑を報告している結果が得られた。初発年齢は、小学校入学以前～中学にわたり、平均 8.18 歳と、4 類型中最も低い値を示しており、他の 3 類型の合計との年齢差を見ても有意に低い。事例の特徴は、「自分という存在の孤立性・唯一性・例外性が強く意識され、これと整合するように「私」を中心とした独特な世界観が形成される。現実性、実在性への懐疑が伴うこともある」とされた。

II. 2 フィールド II

—自我体験質問紙調査 (II)

この調査は、渡辺 (2002b) によって発表されているので、本稿の理解に必要な最小限の記述にとどめる。

上述の自我体験 4 類型ごとに体験の記述をもとめる質問紙を、新たに作成した。4 類型それぞれ 4 項目を呈示し、体験の有無を尋ねた。1 項目でも体験があれば、体験時期の記入と具体的な内容についての自由記述をもとめた。大学生と専門学校生、計 414 (男 95 ; 女 319) 名に対し、授業時に無記名で実施した。自由記述は、調査 I での方法に準じ 2 名の判定者により「判定」された。

判定された自我体験事例のうち「独我論的懐疑」は 37 例であり、これは全回答者中の 8.9% に達した。調査 I と同様、「懐疑」の初発年齢平均 (11.1 歳) は、他の 3 類型の合計平均よりも有意に低い結果となった。

表1 渡辺 小松 (1999) における自我体験調査の質問項目

- | | |
|----|--|
| 01 | この世界はなぜあるのか、と考えたことがある。 |
| 02 | 自分はいったい何者なのか分からなくなったことがある。 |
| 03 | 私と他人とは島のように切り離されていて、他人のことは決して分からない、と思ったことがある。 |
| 04 | 私はいったいどこから来たのだろうか、と考えたことがある。 |
| 05 | 宇宙は巨大で人間はちっぽけだが、その巨大な宇宙について考えることのできる人間は偉大である、と思ったことがある。 |
| 06 | ある日、ふと、「自分は人間だ」とか、「自分というものが存在している」といったことを、強く感じたことがある。 |
| 07 | いま、夢の中にいるのかもしれないと思って、不安になったことがある。 |
| 08 | 私が死ねば世界も消滅するのではないかと、見え先は無になっているのではないかと、といったことを考えたことがある。 |
| 09 | 鏡に映る自分とか、人の目に見える自分、人にそう思われている自分といったものは、本当の自分ではない、と思ったことがある。 |
| 10 | 自分のことを考えたり観察したりしていると、自分が観察されている自己と観察している自己に分裂して感じられる、と思ったことがある。 |
| 11 | 生きているというだけで、私にはかけがえのない価値がある、と思ったことがある。 |
| 12 | 他人も自分と同じようにものを考えたり感じたりするのだろうかとか、私だけが本当に生きていて他人はみんな機械のようなものではないかと、思ったことがある。 |
| 13 | 果てしない時間と空間の中で、なぜ、いま、ここにいるのか?と考えたことがある。 |
| 14 | 自分は他の誰でもない自分なのだ、ということ強く感じたことがある。 |
| 15 | 私はなぜ生まれたのか、不思議に思ったことがある。 |
| 16 | ほんとうの自分とは何か、ということ考えたことがある。 |
| 17 | なぜ、他の国や他の時代に生まれずこの国のこの時代に生まれたのか、不思議に思ったことがある。 |
| 18 | なぜ私は私なのか、不思議に思ったことがある。 |
| 19 | 自分は本当は存在しないのではないかと、思って不安になったことがある。 |

II. 3 フィールドIII

自我体験質問紙調査 (I) と同一の方法で実施された未整理の調査データであり、もともと、著者の一人の授業の一環として 2000 年に実施された。なお、事前に自我体験について説明することはしなかった。調査対象は男女大学生 229 (男 128 ; 女 101) 名であった。

II. 4 これらの調査から示唆されたこと

II.4.1 「回想誘発的」な質問紙法の使用

これらの調査は「質問紙法」と銘打っているが、質問項目は、数量的研究におけるように尺度化のためではなく、体験想起を誘発しやすいという観点から、生

成質問 (generative question) (Flick, 1995/2002) として選ばれている。しかも、質問項目への「反応」ではなく、質問を受けて想起され自由記述されたテキスト自体が、「事例」として、自我体験の名に値するかの「判定」の対象となっている。そもそも、質問項目に「体験したことがある」と「反応」することは、想起された自由記述が自我体験であることを何ら保証しないのである。そして、判定をパスした事例のみが、以後の検討対象となっている。因子分析も行われているが、これも、事例の定性的考察を補う意味しかないと思われる。すなわちこれらの調査は、初期の高石 (1989) による自我体験質問紙調査の結果を踏まえ (11)、数量的研究パラダイムに基づく正統的な質問紙法から、回想誘発的質問紙法とでもいべき一種の質的研究法へと転換を図った、過渡期の産物といえる。

表2 自我体験の判定基準（渡辺・小松，1999）および，判定例と除外例（渡辺，2002b）。

判定基準：①を含む2つ以上の基準を満たしていること。
<p>① 自己が何らかの形で主題となっていること。</p> <p>② 突発性 普段の生活とは連続しない特殊なエピソードとして回顧されていること。具体的には「ふと」「突然」「瞬間」などの表現によって、その体験が生じたときの「唐突さ」や「脈絡のなさ」が記述されていること。</p> <p>③ 違和感 何か理解しがたいことが生じている，あるいは，その体験が普通でない，という独特の感じが伴うこと。</p> <p>④ 孤立と隔絶 自分という存在が，全ての他者，さらには世界全体と対置され，自己の孤立性や例外性が強く意識されていること。</p> <p>⑤ 自己の分離 自分という存在が二つに分離して感じられたり考えられたりしていること。表現としては「いつもの自分」「他人が見ている自分」「鏡に映った自分」あるいは「身体」「肉体」などに対して，これらとは異質なものとして「本当の自分」「本体」「魂」などが対置されていること。</p>
判定例（事例7，8）と除外例
<p>【事例7】 7歳——小学校の帰り道。ふと^②自分が死んだら自分の見ているこの世界はどうなるのかと思ひ，<u>世界が消えるのかと思った^④</u>がそんなことはないと考えなおし，自分が見ているとはどういうことなのか，自分が死んだらどうなるのかを考え続けたがわからず，他の人に相談しようとしても<u>上手く言葉で説明できなかった^③</u>（今回も）。（20歳，男）</p> <p>【事例8】 5歳——人間がそれぞれ個々に考えていることが見えないのが<u>とても不思議^③</u>だった。自分はいつもたくさんのことを考えているのに，他の人は何を考えているのか全くわからなくて，実は自分以外は何も考えないような存在なのではないか^④と本気で思っていた（20歳，女）。</p> <p>【除外例】 14歳——あまりに友人達が人をもの扱っているように感じたので，彼女たちは私（達）に感情があることを知っているのか，と思ひ，却って，自分の方が彼女達にも感情があることを忘れていたことに気付いた。又，店（書店など）の店員達を機械の様に感じていて，自分がバイトをしてみても，初めて，店員も客に対して何らかの感情を持つことを知った。（21歳，女）</p>

II.4.2 事例の「判定」基準について

これらの調査における「独我論的懐疑」の判定について理解を深めるため，渡辺・小松（1999）による「自我体験の判定基準」を表2の上段に掲げ，それに基づいた，渡辺（2002b）による「独我論的懐疑」事例の判定例2つと除外例1つを，下段に例示する。判定例中，下線部分の数字は，判定基準の番号を示す（ただし基準①は省略してある）。

表2の事例7，8とも，下線部分③や②に基準③「違和感」や基準②「突発性」が，下線部分④に基準④「孤立と隔絶」が表現されている，典型的例である。他方，事例8と一見似たところのある除外例は，自他の相互の感じ方に互換性・対称性があり，基準④のよ

うに「自分という存在が全ての他者，さらには世界全体と対置される」までに至っていない。それが，基準③や②にかかわる表現が見られない一因ともなっていると考えられる。すなわち，自我体験の下位分類としての「独我論的懐疑」の特徴は，自我体験全体の前提条件である基準①を別とすれば，基準④に加えて③か②を含むことで，より明確になるといえよう。

II.4.3 「判定」とは何をしているのか

基準の具体的適用箇所を示しつつ判定例と除外例を挙げたとしても，これで誰でもが判定できるわけではない。そもそも，表2の2例は文字通り「典型的例」であり，他に曖昧な例が少なからずあったのである。

この判定基準について、小松（2004）は回顧して言う。「実証研究に必要な方法論上の再現性（この基準に従えば誰もが自我体験とそうではないものを識別できるかどうか）という点では、ここに挙げた判定基準はまだまだ不十分なものでしかない。おそらく、自我体験の事例に知悉している判定者でなければ、これらの基準を活用することは困難だろう。自我体験の判定は、現段階では、多くの部分を判定者の直観に委ねざるをえないのである。」

また、渡辺・小松（1999）でも、論文著者である2名の判定者は、「多数の自我体験の報告例に接して、自我体験と見なされる体験の内容について十分に知悉している」という想定がされ、「これは、熟練した精神科医が真正分裂病（引用者註＝統合失調症）を鑑別する際に『プレコックス感』を診断基準として用いるという方法に倣ったもので、対象について知悉している判定者は明示的には記述できないとしてもその現象の特異性を十分に鑑別できる、という考え方に基づいている」（p.15）とされている。

すなわちこれは、図像的テキストに関する質的研究において大量のサンプルが望ましいことについて、やまだの言う「ある程度大量の絵をみて比較しながら鍛え上げた鑑識眼」（やまだ、2002、p.127）と同様の、「アート（職人芸）」としての判定技法という位置づけである。このように、鑑識眼ができたり、プレコックス感による鑑別診断ができるようになったりすることは、日本で伝統的にいう、「勘」や「コツ」を会得することに通じるであろう。そして、勘やコツは、前述の黒田（2002）の説に照らしてみれば、熟達によって主体が変容することによる認識である。つまり、渡辺・小松の行った判定とは、「主体変様的方法」による認識であったといえる。

ただし、言うところの「プレコックス感」による鑑別診断は、診断者本人に自身の病歴がなくとも可能という点で、本稿の、著者自らの体験を出発点とするという方法論とは少し違って見える。これについては、「考察と展望」で再論するが、いずれにせよ、Ⅲ節でのモデル構成作業での、2名の自己体験者を含むすべて「熟達者」による判定チームの構成は、アートとしての判定技法という方向に沿ったものであるといえよう。

Ⅱ.4.4 独我論的体験を自我体験から独立させる

渡辺・小松（1999）では「独我論的懐疑」は自我体験の一類型として位置づけられたが、渡辺（2002b）では、「懐疑」の初発年齢が他の類型に比べて低いことが二つの調査を通じて確認され、内容的にも異質的なところがあるので、「独我論的体験」として独立の定義がなされた。すなわち、「自分という存在が、すべての他者、さらには世界全体と対置され、自己の孤立性や例外性が強く意識される体験。具体的には『自分ひとりだけが』『自分以外のものはすべて』『他人も自分と同じように～なのだろうか』などの表現を含む。その体験が普通でない、という独特の感じ（『違和感』）を伴うことが多い。初発体験時期は自我体験より1-2歳低く、児童期中盤から前思春期に多いが、児童期前期からさらには就学期以前にまで遡って体験が回想されることもまれではない。」

このような、自我体験研究の成果としての、判定方法の確立と独我論的体験の概念化が、次節での研究の土台になったのだった。

Ⅲ データの抽出とモデル構成

まず、調査Ⅰ、Ⅱで「独我論的懐疑」の名のもとに得られた事例65例（12）を概観すると、同質的ではなく、複数の基準に基づき分類が可能と思われた。さらに、それら複数の基準を組み合わせることで複数次元空間が構成でき、全データをこの空間上にプロットすることでデータ相互の関係が一目で把握できるモデル構成が予想できた。

Ⅲ.1 方法

基本的な方法論は、やまだ（2002）を参考し、実際に得られた事例の記述内容をもとに、「モデル」（やまだの方法論によれば最も抽象度の高いもの）をまず設定し、それに基づき著者2名に第3の判定者を加えた判定チームのブレインストームによって各データを配置することを目指した。

実際には、著者の一人が、「たたき台モデル」をま

ず設定し、データの一部を試みに分類する。⇒判定チームが分類の妥当性を議論しながら、モデルを作り直す。⇒全てのデータを分類する。その過程で、データを再度判定しなおして表2の基準に達するもののみを抽出する。⇒データの減少分をフィールドⅢから追加抽出する。⇒分類作業を完了する。⇒データに「評定値」を与えて分類を連続的空間として構造化する。——というように、手探りの作業が行われたのだった。Ⅲ.2以下では整理された形で述べるが、本稿のように全く新しいテーマを開拓する研究では、作業過程が多かれ少なかれ手探りのこととは不可避であり、「決定に至る軌跡」(Holloway & Wheeler, 1996/2000)、「構造化に至る軌跡」(西條, 2003)を残すことは、再現可能性、反証可能性を含む広義の科学性の確保のために必要なことなので、あえて明示化しておいた。

なお、判定者3(大学院生)は、多数の独我論的な体験報告例に接して、独我論的体験とみなされる体験の内容について十分に知悉しているものと想定されたが、自身が体験者であるか否かは詳らかではない。

Ⅲ. 2 データの抽出

3名からなる判定チームによって上記のフィールドⅠ・Ⅱで収集された65例を、前述の判定基準に照らして再検討したところ、13例は基準に達せずデータから除く結果となった(13)。さらに、モデルの構成作業のためにはサンプルはある程度多いほうがよいという判断に基づき、フィールドⅢより同様の方法による追加抽出を行い、新たに8事例を得た。このようにして、合計60事例が最終的にモデル構成のための生データとなった。これは、3つの調査の対象者合計988名からして、約6.1%の事例出現率ということになる(14)。

なお、事例の再検討過程で、ファンタジー的な世界観が営まれている例が少なからず見つかった。これらの中には、表2の判定例に照らして、基準③「違和感」が表現されているか否かあいまいで、「体験」というよりも「考え」に近い場合が見られた。けれども、基準④を充たしているし、「独我論」というテーマには強い関連性を持つと思われたので、「独我論的ファンタジー」という概念によってそれらを包摂し、「独

我論的な体験とファンタジー」を新たにデータの総称とすることとした。

Ⅲ. 3 叩き台モデルの作成

まず著者1がフィールドⅠよりの28事例を概観し、次の3つの分類視点を組み合わせ、事例を三次元空間にプロットすることで、たたき台モデルを作成した。

①他者指向と世界指向

他者指向：他者の心の問題を核として、その実在を疑っている状態。自己と他者の対称性が破れた状態であり、自己の特異性、例外性が意識される。

世界指向：世界の実在が問題となっている状態。他者指向と世界指向の区別は、「狭義の独我論」と「広義の独我論」の区別(Ⅰ.1.1)に対応するものである。

②体感的と反省的

病理学的な知見：分裂病(統合失調症)を代表とする精神疾患の事例をもとに(Ⅰ.1.2参照)、「いやおうなくその世界に放り込まれている」場合と、その対極としての哲学的反省によって得られた独我論的世界を、区別する目的で設定された次元である。

③超越性と日常性

超越性：より純粋な独我論であって、日常的世界観から見て隔絶性を感じさせる世界観。

日常性：日常的世界観の延長で理解できる世界観。

Ⅲ. 4 全事例の分類とモデルの改良

たたき台となる三次元構造に、あらたにフィールドⅡよりの37事例をプロットし、その過程で、独我論体験と思われない13事例を除き、さらに8事例をフィールドⅢより加えることで新たな体系を作った。新しく事例をプロットしていく中で、著者1が名づけた分類次元とプロットに、著者2と判定者3が質問や疑問を呈示し、対話を進めていく中で新しい次元の名前と、新たなプロットが行われた。その結果、各分類次元が構成された視点が再検討され、用語や概念の変更が加えられた。

具体的には、①の次元を「他者への疑いー世界への疑い」と命名しなおし、概念内容についてはそのままとした。②の次元については、病理学的な知見を最初から用いることの是非が議論された。そこで、記述された体験や世界観における、世界を眺める視点の位置に注目し、「俯瞰するー俯瞰される」という次元に変更した。③の次元は、独我論的問題が、素朴で断片的であっても哲学事典のように直截に述べられているか、ファンタジーや SF にあるような道具設定によって修飾されているかの違いとして捉えなおし、「哲学的ーファンタジー的」とした。

Ⅲ. 5 分類軸の説明

このように設定した各分類次元それぞれについて、具体例をあげながら以下に説明していく。

Ⅲ.5.1 他者への疑いー世界への疑い

独我論的体験は、具体的にはなにかの領域に矛盾を感じ、それを問題とするところからスタートする。その対象が、決してその心の世界を知ることができない他者であるのか、それとも、この私がこの世界の中にいて特定の時間と空間に閉じ込められていることであるのかは、大きな違いであるといえるだろう。著者らは、前者を他者への疑い、後者を世界への疑いと呼んで各事例を分類した。まず後者の典型的な事例を示す。なお、以下で「事例番号」とは、後出の表3における事例番号にあたる。

【事例番号 44】

自分が死んでも時間が進むのかどうかを考えた。自分のまわりで動いている人も、物も、自分の体もほんとうは何もないのではないかという錯覚におちいってとても恐く感じられた。その感覚は、一瞬のことであって、すぐにもとの感覚にもどり安心した。

【事例番号 19】

眠っている時の記憶がないことを強く感じて、その間何も考えていないと思った。そのまま眠りから覚めることがなかったらということを考えて、何もない世界があるのではないかと不安に思っ

た。

【事例番号 41】

リラックスしている時に、この世界のすべては、夢を見ている人間の夢の中で、私は登場人物の一人であるが、夢を見ている本人で、私が夢からさめれば、すべては無になる。そして無になったときに自分はどうなるのだろうか、なぜなら、私は夢を見ている本人ではなく、その本人の意思によって動いている人間（夢の中の）だからです。…というようなことを考えた。しかし、世界すべての人名や、世界すべての出来事を人間の脳一つの夢の中で考えられるものではない。だから、夢ではないと思うのだが、もしも、エイリアン（宇宙人）の見る夢だったらとか、色々考える。

こうした事例は、他人の夢の中と考えようともあるいは宇宙人を持ち出そうとも、世界の時空間構造の実在性が疑われているという点で共通している。

【事例番号 38】

小学校 2, 3 年の頃だったと思いますが、その時期に急に自分以外のものに対して疑問をもつようになったと思う。／他人も自分と同じように物を考える行為をしているのだろうかなど考えると不思議に思いました。また、動物や昆虫にも物を考えることができるのか？とか世界をどんなふうに感じているのかとても興味をひかれました。このことについては今もなぞのままです。

【事例番号 16】

6 歳／小さい頃、母親がどこかへ行ってしまわないかとか本当はロボットみたいなものなのではないかという恐怖を抱いたことがあったような気がします。また中学頃まで、自分のカラに閉じこもっているようなところがあり、誰も私のことを分かる人はいないような気がしていました。／でも高校頃から、本音を語り合えるような人間関係ができて、皆同じ様なことで悩む人間であることに気がきました。

【事例番号 2】

私には青に見えるものでも他の人は本当は違う色

（例えば赤）に見えているのではないか、と思った。そしてその人は私から言えば赤を「青」と呼んでいるのではないのかと思った。／そして母が誰かに指令を受けてこの地球の私のところに来たのではないか、と考えたことがある。

以上3例は、存在の疑いがかけられている対象が母親であったり他の生物や他人一般であったりするが、先に説明した世界の時空間構造そのものが疑われている3つの事例に比べると、「自分以外の、心を持っている可能性のある存在」であるという点で、まったく異なる事例といえるだろう。これらの事例を区別する目的で、著者らは「他者への疑い—世界への疑い」という分類基準を導入した。

III.5.2 俯瞰する—俯瞰される

次に、「体感的と反省的」という分類基準をもとに、世界を眺める視点の位置を重視し、「俯瞰する—俯瞰される」という基準を再設定した。

【事例番号 9】

きっかけ：世界のあらゆる国の人々（日本中のあらゆる人々）を考えるようになった。状況：私の会ったことのない人、かつて会っていたが今は長い間会っていない人は本当に生きているのかと考え、不安になっていた。内容：自分が行動している間だけ私の周りの人々が行動しているのではないかと考えていた。

【事例番号 17】

自分が存在している時間が自分だけのもので他の人は活動していなくて、自分中心に世間が回っているのではないかと考えたことがある。

【事例番号 23】

自分の視界に存在しないものは実際はなくて、自分が移動するたびに新しいものができると考えたことがある。／例えば、今自分がこうして教室にいますと、教室と外の景色（自分の視界）以外は存在しなくなるというふう考えたことがある。

以上の事例は、いずれも視点が「今ここ」に固定さ

れており、その場所から世界全体を眺めているという事例である。それに対し、以下の事例では、「今ここ」は誰か別の存在（視点）によって眺められるものとなっている。

【事例番号 22】

その瞬間がバラバラマンガみたいになっていて、例えば53ページをめくると止まった自分がいて、めくって行って動きになるのかと考えた。そんなはずはないのに。

【事例番号 34】

小さい頃に、人間は機械でできていると、当時みていたテレビ番組の影響と、実際父がはんだゴテなどを使って配線いじりをしている場面がリンクして、思い込んでいた事や、私だけが生きていて、他の人は私の空想の内の人物でというように、勝手に自分で話をつくって、ひょっとしたら、私もなにか大きなものの中で一つの役割をになっているにすぎない小さな存在かもしれないという事を思い込んでいる時期がありました。

【事例番号 52】

自分が誰かにためされてるような気がしてたから、そのためしている誰かが私のためにこの世界をつくって、自分を覗きつしている。／だから私がいけない所までつくる必要ないし、行ったらつくっていくんだって感じてた…のかな。

III.5.3 「哲学的—ファンタジー的」

最後の次元は、「哲学的—ファンタジー的」と命名した分類次元である。この次元において「ファンタジー的」としたものは、以下のように複雑で具体的な装置を用いて、独我論的世界が1つの物語になっているものが多い。例えば以下の事例などはその典型である。

【事例番号 20】

多分幼稚園くらいときだと思う。親が（周りの人が）自分にやさしくしてくれるのはきっと自分がよその星からきたお姫様でまわりの人（親）や地球上のものや私に見えるすべてのものは私のた

めに用意された教育用のものだと思っていた（機械ではなくふつうの人間とっていたけど）。だから他の人は私が見えない間は適当に休んでいて、私の目に見えるときだけが出演で働いている（つまり自分の役を演じているのだ）と思った。私の本当の親はそのよその星にいて私の生長（ママ）を見守っているのだと思ったことがある。そう思うとまるで自分が主人公になったきがした。／小さい頃いつもなぜ自分の気持は自分だけしか分からないのか本当に不思議だった。自分の気持は実は他の人には分かっているのではないのかと思ったりした。

また、「夢オチ」とは物語の結末としては最も安易なものであるが、その体験をしている本人にしてみれば、それも1つのファンタジーであろう。ある意味で、最もありふれた事例ともいえる。

【事例番号4】

現実のすべては本当に起こっていないことで、自分は自分の夢を見ているのではないかと考えた。夢を見ている自分はまだ生まれる以前の自分で、今の自分は、将来の自分であると考えた。またそういうように考えているうちに、実は夢を見ているのは自分ではなく他人であるとか、世界は他人の作った箱庭のようなもので、生きているのは自分だけで他の人は機械とかそのたぐいの偽物では、と考えたこともある。最終的には生きていること自体を不思議に思う。

【事例番号7】

そういうようなマンガ又は小説を読んで、今、私が考えていることや、今いる世界は全て自分が見ている夢で、本当の自分が起きたら、見ている夢は消えてしまうのではないかと、なんてことが本当だったら怖いと思った。

このような複雑な設定に対し、「哲学的」な事例とは、素朴であっても「意識」や「存在」などといった抽象的で哲学辞典にあるようなキーワードを用いて、独我論的な疑問を呈示しているものである。

【事例番号8】

自分の意識はここにあって、友だちの意識はどこにあるんだろう、と考えたのがきっかけ。私だけがこんなことを考えているのかと思っただけが特別な存在（あまりいい意味ではなく否定的に）に感じられた。今でも疑問に思っている。

III. 6 評定方法

III.6.1 二項対立か連続軸か

このような3つの分類基準に対し、これらは単なる二項対立であるのか、それとも連続的な軸を構成するものであるのか、という疑いがもちあがるかもしれない。実際、分類作業の過程で、私たちは少なからぬ中間的事例に遭遇したのだった。例えば、次の事例番号11などは、他人の心に対する疑いと、自己を含めた世界全体の实在性への疑いが共存する点で、「他者への疑いー世界への疑い」の両極の中間例であると言える。

【事例番号11】

きっかけは祖父の死だと思う。自分が考えている、ということが自分の生きている世界の全てで、他はみんな人形か何かで話はしても考えたりしない、という気がしていた。又は、本当は今生きていると思っている自分も誰かの夢の中に出てきているのでは、と思った。

このような中間的事例が3つの分類軸すべてに関しで見出された。そこで「中間的事例」というカテゴリーを設定することとしたが、そうするとさらに、「中間」と「両極」のそのまた中間例とすることが判定者として最も心理的抵抗が少ないような事例も見出された。

こうした点から私たちは、事例を単に二項分類するのではなく、5段階の「評定値」を与えることとしたのだった。これは、数量的アプローチにおけるような比率尺度もしくは間隔尺度の構成を目論んだものではない。より判定者の心理的現実をも忠実に反映できるような、質的な意味の次元として事例を記述したのだ

表3 2名の判定者(W, K)による評定結果。3つの分類次元に関して、それぞれ5段階の数値を割り当てた。全60事例のうち、本文中でコメントした17事例の結果のみを示してある。事例番号が10以下の事例(ここでは事例番号2, 4, 7, 8, 9のみを表示)では、判定者の協議によって評定値を完全に一致させてある。

	俯瞰する — される					哲学的 — ファンタジイ的					他者への疑い — 世界への疑い																			
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5															
判定者	W					K					W					K														
事例番号 2	3					3					2					2					1					1				
4	3					3					5					5					5					5				
7	2					2					5					5					5					5				
8	1					1					1					1					1					1				
9	1					1					3					3					1					1				
11	2					3					2					1					3					2				
16	2					1					4					2					1					1				
17	1					1					2					1					1					5				
19	1					1					1					1					5					5				
20	3					3					5					5					1					4				
22	4					5					4					4					5					5				
23	1					1					2					1					5					5				
34	3					3					5					4					2					4				
38	2					1					1					1					1					1				
41	3					5					5					5					5					5				
44	1					1					1					1					5					5				
52	5					5					5					3					5					5				

と考えることができよう。

III.6.2 評定方法

全60事例について、各3つの次元についての5段階からなる評定値を与えた。例えば、「他者への疑い—世界への疑い」という次元についていえば、もし当該事例が、完全に「他者への疑い」であるなら「1」を、「世界への疑い」であるなら「5」を、評定値として与えることとした。

評定を与える作業を、できるだけ共通了解性をもって進める目的で、まず全事例からランダムに選んだ10個の事例について、2人の著者が直接に議論をしながら評定を行った。その結果、評定についての十分な合意が形成されたと思われたので、残り50事例をそれぞれ独立して評定を行った。

III. 7 結果

評定の結果を表3として示す。ただし、紙面の都合で、本文中にテキストを掲載してある17例についての評定結果のみ掲載した。

独立に評定した3つの次元について、相関係数を求めたところ、「俯瞰する—される」は $r=0.81$ 、「哲学的—ファンタジイ的」 $r=0.78$ 、「他者への疑い—世界への疑い」 $r=0.71$ という結果となった。これらの値は十分に高いものであり、ランダムに選ばれた10個に基づいて形成された合意が、他の事例にも敷衍できるものであることを示している。

また、評定に従って全事例を3次元座標軸上にプロットしたものを、図1として示し(評定値の合わない事例は、その中間値を便宜的に図示した)、視覚的イメージ化の助けとした。

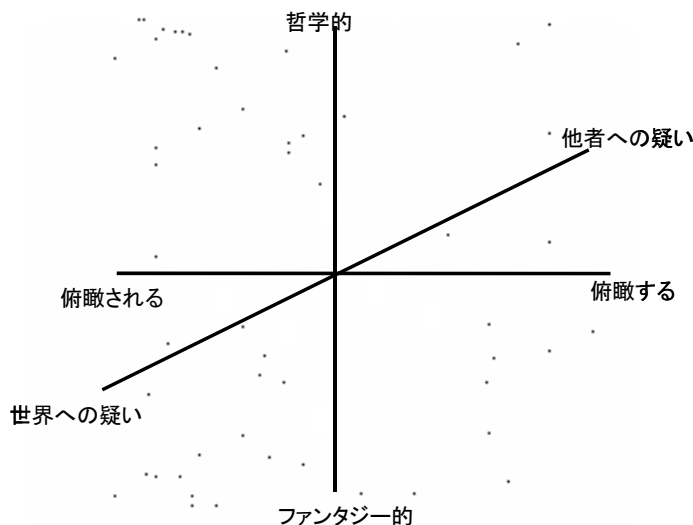


図1:各事例が、3つの次元のどの位置にあるのかを示した模式図。各1つの点は各事例を表している。各点の座標は、2人の判定者の平均値によって決定された。

IV 考察と展望

本研究で私たちは、独我論的な体験を記述する次元について、3名からなる判定チームの分類と評定の作業によって、3つの次元を発見することになり、「他者への疑い－世界への疑い」、「俯瞰する－俯瞰される」、「哲学的－ファンタジー的」と名づけたのだった。すなわち、まず、独我論的体験のターゲットが他者であるのか、それとも時空間的な世界であるのか、この点が、体験をわける大きなポイントとなる。次に、その体験の根底にある視点の位置により、観察、もしくは俯瞰されているか、あるいは観察しているのかで異なることになる。第三に、「意識」や「自分」などの用語を用いて記述されるシンプルで抽象的なものであるか、それとも複雑で具体的な装置を用いることで独我論的世界が1つの物語になっているかで、分類されることになる。

ここで、①独我論的体験データの抽出法の開発、②実体的な構造モデルの提起、という本稿の目標がどれ

ぐらい達成されたかを振り返ってみよう。

IV. 1 データ抽出法の開発

IV.1.1 判定基準について

独我論的体験事例の抽出にあたって最も肝要なのが、何をもって独我論的体験と見なすかという判定基準にあることは、序論（I.3）で述べたところである。この点に関して私たちは、まず、渡辺・小松（1999）による自我体験判定基準（表2）中の「独我論的懐疑」に関係する項目を出発点とした。ただし、この判定基準は実証主義的な意味での再現性を保証するものではなく、これを活用するには「プレコックス感」による精神科診断にも比せられる「アート」、つまり「勘」や「コツ」の洗練が必要であった。また、アートや勘に訴える研究方法に対して通常なされる、主観的・恣意的という批判に対しては、黒田（2002）の、「客体観察的方法／主体変様の方法」という対置による、方法論的認識論の基礎付けの可能性を示しておいた。

けれども、本稿が出発点を著者の自己体験に置いたことは、単なるアートではなく追体験に基づく熟達を、

このテーマが要求しているのではないかという懸念をもたらすかもしれない。たとえば、「独我論的懐疑」をその下位分類として含む自我体験研究について、高井（2004）は次のように評言する。「自我体験そのものは実証的・客観的な方法ではとらえにくいものである。／その理由として、第一に、この自我体験というものが文字通りきわめて個人的で、共有しにくいものである、ということがあげられる。自我体験について説明しようと試みた人であれば首肯するであろうが、どれだけ言を重ねても体験をしていなかった人にはわかってもらえたかどうか確信できない。」要するに、体験者でない限り、判定基準の作成・活用に基づく研究が不可能ということになってしまわないかと、危惧しているのである。

このような危惧に対して、まず、独我論的体験の自覚的な体験者でなくとも、多くの事例に接していくうちに何らかの潜在的な記憶が呼び覚まされ、追体験に基づく判定ができるようになる可能性はあると思われる。問題は、「よみがえる一片の記憶もない」場合であるが、私たちは、そのような場合でも妥当な判定基準と典型例の提供があれば、「非体験者」であっても熟達を積むことによって、判定が可能になると考える。ただし、体験者の判定が、自らの体験の追体験に基づくのに対して、非体験者のそれは、「自分にとってこのような体験は異質」という違和感、一種のプレコックス感に基づくのである。そもそも熟達した精神科医が統合失調症の患者に対していただくプレコックス感とは、松尾・宮本（1995, pp.39-40）によれば、「記述不可能」だが「はっきり特定できる」「非日常的」な「体験」なのであるから。そして、追体験することによる判定にせよ、追体験できないことによる判定にせよ、両者に共通のアートを、「主体変様的」というキーワードによって方法的に基礎付けることができるのである。

IV.1.2 事例の組織的収集法と質問紙調査

事例の組織的収集法については、本稿では、もともと他の目的で行われた調査（自我体験質問紙調査）の結果をフィールドとして利用するにとどまり、独自の調査を計画・実施するにいたらなかった。けれども、自我体験質問紙調査は、多少の改良を加えれば、独我

論的体験調査へと発展的に転用できるものと思われる。非構造化面接などの技法の発達した現在では、質問紙調査は、質的研究のためのテキストの収集法としてはサーベイツ的補足的役割にとどまるとされる（Flick, 1995/2002）。しかしながら、自我体験調査で用いられたような回想誘発的質問紙法は、独我論的体験事例収集法として独自の意義を備えるものである。

まず、無記名を原則とする質問紙法は、独我論的体験の特異性からして、調査対象者の匿名性を保護すると同時に、回想の表出にも有利に働くことが考えられる。実際、独我論的体験にかかわる質問項目を指して、「こんなことを考えるヤツは危ない」といった意味のことを書き込んで来る調査対象者もおり、調査者とのより密接な接触を要するデータ収集法へと歩を進めることを、ためらわせるものがある。

次に、偶発例研究にとって汎用性が高いことである。質問紙法で得られる記述データが断片的で意味不明瞭なものになりがちなのは確かであるが、偶発的事例からデータを抽出する場合もまた、しばしば断片的で意味不明瞭なテキストの中からの抽出をやむなくされるのである。序論（I.2.1）でも瞥見したように、将来、インターネット掲示板が偶発的事例収集のための沃野となるかもしれず、質問紙法で得たテキストに基づいて判定基準を精緻化し、判定のアートを磨くことは、その種のフィールドにとって汎用性が高い方法の開発につながるであろう。

第三に、比較的簡単に多数のサンプルを得られることである。サンプルが多数あることは、モデル構成のためにも、また、モデル構成をめざす質的研究に欠かせない「鑑識眼」を鍛え上げるにも、有利である（やまだ, 2002）。さらに、独我論的体験の心理学的解明のためには欠かせない、集団別の出現頻度など数量的研究との組み合わせにも役立たせることができる。

ただし、注2でも触れたように、たとえば8歳頃の時のこととして想起した体験が、本当に述べられたようにその時期に体験されたのかどうかは結局証明できないという、「回想法のもつ実証性の不十分さ」（高石, 2004）を乗り越えるための方法的工夫の開発が待たれるところである。

IV. 2 構造モデルの提起とその意義

三次元として構成された独我論的体験事例の構造は、集団、文化、年齢などの違いによってこれらの構造がどのような変異を示すかについての、色々な研究課題を拓くだろう。たとえば、本研究でフィールドとした3つの自我体験調査は、「普通の青年・学生」を対象とすることを旨としているが、実態は理学部や文学部など基礎系学部の学生が主で、そこに第二フィールドのみ、専門学校生105名が調査対象に含まれていたのだった。ところが驚いたことに、この専門学校生群からの独我論的体験抽出例は、皆無なのであった(渡辺, 2002b)。ここからして、基礎系学部学生としてのモラトリアム状態が、独我論的体験の想起や表出に何らかの有利な条件を与えているのかもしれないと考えられるし(15)、アイデンティティとの関係についての仮説を導くこともできよう。

けれども、この三次元構造モデルの意義は、そのような外在的で数量的研究に持ち込みやすい仮説の展開にあると同時に、内在的なものでもある。連続的な次元として多数の事例を分解・配置することによって、これまで病理か哲学者の妄説ぐらいにしか思われていなかった独我論を、より日常的で間主観的な世界観や、独我論とは別物と思われていた世界観と、連続性のあるものとして理解する道が開けたのである。

まず、「俯瞰する-俯瞰される」の分類軸を見ると、「俯瞰する」の側に分類される事例番号9, 17, 23等は典型的に独我論的であるが、「俯瞰される」の側の事例番号22, 34, 52などでは、独我論とは異なった世界観が暗示されているように見える。にもかかわらず両群を一つの次元軸に沿って配置してみると、両群が、「自他の対称性の破れ」として、統一的・連続的に理解できることが分かる。すなわち、軸の一方では自己が唯一者として世界に君臨し、他方では他者が不可解で超越的な視線や意思として君臨する。前者が、他者の不在、すなわち「間主観性の破れ」という、哲学上の本来の独我論説に対応するのに対し、後者は、ある種の宗教的な世界観や精神病理学的な体験を連想させるところがある(16)。

また、日常的な世界観との連続性を、とりわけ「哲

学的-ファンタジー的」の軸に見ることが出来る。たとえば、事例番号23の「自分の視界に存在しないものは実際はなくて、自分が移動するたびに新しいものができると思ったことがある」といった「哲学的」な事例は、世界観としてみると間主観性が破れた状態である。このような意見を伝えるべき「他者」もまた、「実際はない」ことになるからである。このような「間主観性の欠如」は、極めて非日常的な世界観を示している。ところがこれが、「エイリアンの見る夢だったら」(事例番号41)になると、たとえ「世界の实在性」が破れていても、その世界を夢見るエイリアンという实在の他者が出てくる以上、より間主観的になり、日常的な世界観に近づく。

また、ある種の事例(事例番号2や事例番号20)で他者が宇宙人ではないかという疑いが出現することは、「なぜ自分の気持ちは自分にしかわからないのか」という、もともとは「間主観性」そのものが問題になる体験を、「自他の対称性」が破れる程にファンタスティックでありながら間主観性だけは維持されるような、より日常性に近い世界観を作り出すことで納得しようとするにいたったのだという印象を受ける。すなわち、もともとの、より純粹で抽象的な体験に対して、次第に複雑な道具を用いて合理化の過程が進行し、その結果、一件奇妙ではあるが、なんらかのオチをつけようとする物語的な観念へと発展したのではないかという、「発達の」な印象を受けるのである。

以上、考察を行っているとき、新たなる視点が浮かび上がってくる。すなわち：「独我論的な体験とファンタジー」の構造全体は、「間主観性」、「世界の实在性」、「自他の対称性」のいずれかが破れた状態を表現している。この中で核となるのが間主観性の破れた状態で、これが哲学上の学説としての独我論と対応する)。これは、また、3つのキーワードを用いて構造化が可能な、新たなるモデルを示唆しているといえよう。ただし、これまでの3次元構造モデルが、記述された事例と同じ水準の日常言語で記述され、分類された「現象的モデル」であるのに対し、回想された体験の意味を哲学的に解釈したメタ的なモデル、「深層モデル」であるといえよう。

また、この深層モデルでのキーワードを使えば、次のような「発達の」な仮説も導かれうる。人口の何パ

一セントかの人生のかなり早期に、「間主観性の自明さ」に亀裂が走るような体験が生じる。ある場合、それは、「この世は夢ではないか」といった「世界の实在性の自明さ」への疑いに発展し、また、「他者は宇宙人ではないか」「超越的な視線によって見られたり仕組みれたりしているのではないか」といった、「自他の対称性の自明さ」への疑いへと発展する。世界の实在性への疑いは、東洋的な思想につながる要素を含み、自他の対称性への疑いには、一神教的な思想や体験につながる要素を含む。そして両者とも、ファンタジーやSF的想像力・創造力の源泉となりうる……。

もっとも、このような仮説を継承発展させてゆくためには、本稿で採用したような多数例の検討とはまた別の、少数例に焦点づけた縦断的な方法の採用が必要となるであろう。

IV. 3 終りに

最後に、独我論的体験というテーマに取り組むにあたって、独我論という世界観を最初から誤謬ときめつけて説明し去るという態度だけは、取るべきではないことを強調しておきたい。著者らがこのテーマに取り組み始め、学会や商業出版を通じて発表を始めて以来、心理学研究者を含む意外に多くの人々から、「実は私も子供の頃そのような体験をしたことがある」といった話を聞くことができたのだ。にもかかわらずこのテーマが心理学において取り上げられることがなかった理由の一つは、私たちが、このような体験を、そこから脱却すべき子供っぽい自己中心性の名残として説明し去るといった枠組みに、無自覚裡に捕らえられていたからではないだろうか。たとえば石川（2001）も、序論（I.1.2）にあげた事例について、「……「他人にも自分と同じような意識があるのか？」ということを実際に問わねばならないのも、自己＝世界という前個的な自己中心性、自己と対象表象の未分化を示している」と、典型的に退行論的な解釈を示し、それ以上にこの事例の考察を深めることがなかったのである。なるほど独我論的体験という心理現象は、本研究でも明らかになったように、割合としても少数派であり、加えて、「長年にわたり信じてきた」というよりも、「発達の一時期に思ったことがある」といった一過性

の現象という側面もあるため、心理学研究のテーマとして扱われにくい面があったのであろう。けれども、少数派かつ一過性の現象であっても、もし当事者の視点、「内的視点」（Holloway & Wheeler, 1996/2000）に立つのであれば、「その頃はそう思えて仕方がなかった」ことを尊重しなければならない。その点、マイノリティの内的視点に立ち、それを研究のまな板に乗せるという側面を有する質的アプローチ（Flick, 1995/2002）にとつて、このテーマはふさわしいものと考えられるのである。

本研究によってようやく垣間見られた〈独我論的な体験とファンタジー〉という心理現象は、「間主観性」「世界の实在性」「自他の対称性」の自明さが、自明でなくなるような心的リアリティの存在を示唆するものといえよう。それゆえ、この現象は、これらの概念への根源的な反省の契機としても理解されることができよう（17）。そして、ここにこそ、独我論を心理学研究のテーマとすることの究極的な意義があると思われる。

注

- (1) 例外として金沢（1999）、渡辺（2002a）のものがあるが、心理学において継承可能な研究テーマとすることを目的としたものではないので、本稿で特に関及することはしない。
- (2) なお、本稿で扱うのは回想データであり、自己報告された通りの時期にその体験を本当にしたか否かの問題に直接答えるものではないので、厳密には「体験回想」というべき場合が多いが、煩雑さを避け、単に「体験」と表記した。
- (3) 出典の明記がなく、原典は詳らかにできなかった。
- (4) 公刊物からの引用としたのは、本稿の目的に合せての記憶の改変という嫌疑を避けるためと、「記述された比較的短いテキスト」として、他の事例との質をできるだけ揃えるためである。なお、引用事例中、「/」は、原文での行変えを表すこととする。以下同様。
- (5) この例は、もともと、高石の過去の調査（高石, 1989）の中で得られ、高石（2004）で初めて公表されたものである。
- (6) もともと黒田は、ヴィンデルバンドの法則定立的（nomothetic）／個性記述的（idiographic）という学的認識の二分法に対して、第3の認識法として「主

- 体変様の (idiomodific)」という語を造語したのだったが (Kuroda, 1985), その後, 「客体観察的」との対比を強調するにいたっている。
- (7) 研究者の客観性を前提としない質的アプローチにおいては, このようにテーマと研究者との関係性を示しておくことが, 「決定に至る軌跡」(Holloway & Wheeler, 1996/2000), 「構造化に至る軌跡」(西條, 2003) を残す点からも意義があると思われる。
- (8) 独我論的体験という例外事象を研究することの, 時代的社会的意義付けも重要な問題であるが, 本稿の域を越える。なお, 「例外事象」研究一般の意義付けについての手がかりを小倉 (2003) に見出すことが出来る。
- (9) 学会誌という制約上, 明示できなかった点の詳細は, 小松 (2004) を参照のこと。
- (10) 「哲学者の思索の場以外」に体験の事例を見出すという方針は, 自我体験研究にも本研究にも共通の方針であり, 哲学科学生を調査対象から除外し, かつ, 偶発例の紹介に当たっても専門哲学者による自伝的体験記述を除外している。
- (11) 高石は, 最初に自我体験質問紙を作成した研究の中で言う。「作成された尺度については下位尺度の因子的妥当性が充分には得られず, 今後の改良の努力が望まれるが, “体験”という多次元の複合的な概念を扱ったものであるという性質上, 各下位尺度の独立性を完全に達成することは困難な作業と言わざるを得ないだろう。一方, 自由記述では, TST や作文・手記法によるよりも濃縮された深い内容の資料が多数得られ, 本研究の方法の有効性が示唆された。……」(高石, 1989, p.42)
- (12) これらの事例の多くは未公表のものである。
- (13) つまり, 以前の判定は, 甘いという結果になったわけである。その理由として, ①あいまいな例はなるべく救いあげるという暗黙の方針があったこと, ②以前の判定が「自我体験」判定の一部として副次的に行われた結果, 独我論的体験に注意を集中できなかったこと, が考えられる。
- (14) この 60 例には, フィールド (I) での「独我論的懷疑」のような, 1 名が複数事例を提供する場合は含まれなかったため, 事例数と事例報告者人数は一致する。
- (15) 本稿での, 独我論的体験の出現頻度 6.1%が, 「青年一般」に普遍化できそうな高い値であることも, 推測されるところである。
- (16) 本稿では取り扱っている余裕がないが, 「病的」事例をも連続的スペクトラムの一端として理解することは, 精神病理学や臨床心理学へ継承発展可能なテーマの設定を促すだろう。

- (17) 心理学も人間科学である以上, 間主観性を自明なる前提としている。けれども, 間主観性を自明なる前提として出発した学が間主観性の自明さを問題にできないわけではないことは, 時空間世界の実在性を自明なる前提として発展してきた物理学が, 20 世紀以後, その自明さを問題にするにいたった例からも, 言えることであろう。

文 献

- 天谷祐子. (2003). 「私」への「なぜ」という問いについて: 面接法による自我体験の報告から. 発達心理学研究, 13, 221-231.
- Flick, U. (2002). 質的研究入門: 人間科学のための方法論. (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH*.)
- Goethe, J.W. (1958). ファウスト第2部 (相良守峯, 訳). 東京: 岩波書店. (Goethe, J.W. (1932). *Werke, V, Festausgabe zum 100 jährigen Bestehen des Bibliographischen Instituts. Meyers Klassiker-Ausgaben*.)
- Heinlein, R. A. (1982). かれら. 輪廻の蛇 (矢野徹・他, 訳), PP.255-284. 東京: 早川書房. (Heinlein, R.A. (1959). *The Unpleasant Profession of Jonathan Hoag*. Noam Co.)
- Holloway, I. & Wheeler, S. (2000). ナースのための質的研究入門: 研究方法から論文作成まで. (野口美和子, 監訳). 東京: 医学書院. (Holloway, I. & Wheeler, S. (1996). *Qualitative research for nurses*. Malden: Blackwell Science Ltd.)
- 石川勇一. (2001). 無遠近法的体験をめぐる統合と退行の心理療法過程: 階層的発達論の視点から. *トランスパーソナル心理学/精神医学*, 1, 40-47.
- 金沢 創. (1999). 他者の心は存在するか. 金子書房.
- 金沢 創. (2004). ぼくたちの住んでいたもう一つの世界. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎: 自我体験の心理学 (pp.103-127). 東京: 新曜社.
- 小松栄一. (2004). 自我体験: 沈思のディスコース. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎: 自我体験の心理学 (pp.164-184). 東京: 新曜社.
- Kuroda, M. (1985). Three types of science: nomothetic, idiographic, and “idiomodific”. *Paper presented at XXIIth World Congress of Psychology (Leipzig, DDR)*.
- 黒田正典 (2002). 東洋と西洋: 主体変様の認識. 渡辺恒夫・村田純一・高橋滯子 (編), 心理学の哲学

- (pp.273-303). 京都：北大路書房。
- 増田みず子. (1986). 麦笛. 岡山：福武書店.
- Maslow, A. H. (1998). 完全なる人間：魂のめざすもの (第2版) (上田吉一, 訳). 東京：誠信書房.
(Maslow, A.H. (1962). *Toward a Psychology of Being*, 2nd ed. New York: Van Nostrand Rheinhold.)
- 松尾 正・宮本初音. (1995). 分裂病者現象はいかにしてその存在論的真理を暴露しうるのか. 福岡行動医学雑誌, 3 (1), 28-53.
- Merleau-Ponty, M. (1982). 知覚の現象学. (中島盛夫, 訳). 東京：法政大学出版会. (Merleau-Ponty, M. (1948). *Phenomenologie de la perception*. Paris: Gallimard)
- 小倉康嗣. (2003). 再帰的近代としての高齢化社会と人間形成：〈意味感覚としての隠居〉をめぐる現代中年のライフストーリーから. 質的心理学研究, 2, 56-83.
- 西條剛央. (2003). 「構造構成的質的心理学」の構築：モデル構成的現場心理学の発展的継承. 質的心理学研究, 2, 164-186.
- 島崎敏樹. (1976). 人格の病. 東京：みすず書房.
- 高井弘哉. (2004). 自我体験は発達心理学で研究できるか？ 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎：自我体験の心理学 (pp.185-213). 東京：新曜社.
- 高石恭子. (1989). 初期及び中期青年期の女子における自我体験の様相. 京都大学学生懇話室紀要, 19, 29-41.
- 高石恭子. (2004). 子どもが〈私〉と出会うとき. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎：自我体験の心理学 (pp.43-72). 東京：新曜社.
- 渡辺恒夫. (1996). 輪廻転生を考える：死生学のかなたへ. 東京：講談社.
- 渡辺恒夫. (2002a). 〈私の死〉の謎：世界観の心理学で独我を超える. 京都：ナカニシヤ出版.
- 渡辺恒夫. (2002b). 自我体験の類型, 判定基準, およびアイデンティティとの関係. 東邦大学教養紀要, 34, 9-25.
- 渡辺恒夫・小松栄一. (1999). 自我体験：自己意識発達研究の新たなる地平. 発達心理学研究, 10, 11-22.
- やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス：「この世とあの世」イメージ画の図象モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.

をいただいた。厚く御礼申し上げます。

(2004.4.23 受稿, 2004.9.20 受理)

謝 辞

なお、西條剛央氏 (国立精神・神経センター精神保健研究所) には、原稿を読んでいただき、有益なコメント